



民國佛教期刊文獻集成

任繼愈題



民國佛教期刊文獻集成

任繼愈題

第114卷



南瀛佛教會會報

全國圖書館文獻縮微復制中心

NANETSUKYO

XI 6

南
瀛
佛
教

號 月 六

行 發 會 教 佛 瀛 南

大
日
本
北

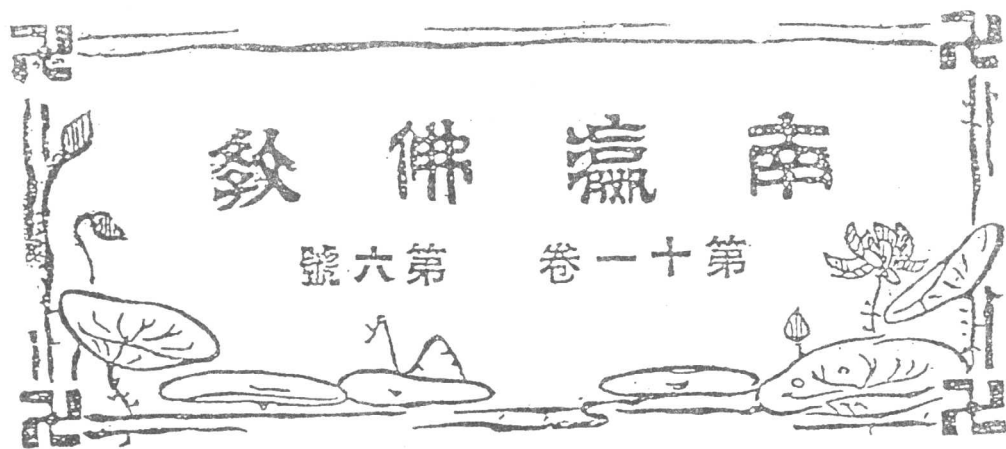


目 次

▲卷	頭	言	一
▲佛教の慈悲と國際事業	境野	黄洋	二
▲黨國に於ける生祠の實例	李	添春	五
▲明代儒佛兩教關係史	李	孝本	一〇
▲真心直說註解(十二)	林	秋梧	一九
▲世界的救星(下)	林	德林	二三
▲信運命不如信因果	周	德俊	二六
▲黨國に於ける宗教の概要(元)	社	寺係	三〇
▲南嶺佛教會沿革(四)	編	輯子	三三
▲本會第十回總會記事(完)	本	會	三五
▲會費領收報告—新入會員名簿	本	會	四〇
▲雜	報		四一
▲通	信		四三
▲詩	集		四六
▲編	輯		
▲後	記		

南 瀛 佛 教

第十卷 第六號



本島に於ける舊慣宗教は、一般に支那大陸に於て儒佛道の三教に低級なる民間信仰を加味混同したものが、明末後傳來されたものであり、爾來殆んど何等の宗教的展開の形蹟を見ない。否、反つて傳來後に於て一層俗化され、漸次に墮落して仕舞つたのである。

今寺廟に於て比較的多數に祀られて在る祭神を擧ぐれば觀音、彌陀、媽祖、孔子、城隍爺、開漳聖王、清水祖師、賢澤尊王、文昌帝君、關帝、三山國王、元帥、千爺、土地公、有應公等であるが、其他の祭神を一々列擧すれば恐らく千種以上に及ぶであらう。

其中には佛教系統の神佛もあれば、道教の神仙もあり、儒教の聖賢もある。又同一神佛にして三教各々其名稱を異にして之を祀ることもある。信仰者は唯一の神佛に奉仕すること稀にして多數又は凡有の神佛を信仰する者が多い。

祭神は其本體又は其支配の範圍等からして、之を天上界、虛空界、地上界、水上界、幽冥界等に區分することが出来、從つて民衆の信仰は宗教學的には之を呪物崇拜、動物崇拜、自然崇拜、偉靈崇拜、祖先崇拜等に分類することが出来やう。概して言へば原始的倫理的宗教であり、雜教混合の多神教であると云ふことが出来る。

本島民衆の生活が一般に複雑であることは多方面に於て之を見出すことが出来る。就中其多神的雜信仰は最も之を表明するものであり、この信仰は同時に一般民智の程度を證明する尺度ではなからうかと思はれる。其信仰は倫理的ではあるが、功利的であり、利己的であり、從つて徹底的に現實的である。中には衛生に違ひ、教育に背き、道理に反するものも少くないが、然し風教に裨益し、修養に資すべきものも多々あるのである。人生の目的に背き、國家社會の理想に違反するものに至つては迷信と云ふよりも邪信惡信と稱すべきである。近來教育の著しき普及に伴ひ、民智頓に開發したるの歟あり、自稱新人たる一部の識者出で、生活の改善風教の刷新を叫び、さては在來の宗教を批判し、之を迷信なりとて排斥し打倒すべきである等と頻りに絶叫せられる。

宗教を批判し論駁することは教界の爲め、頗母しく慶賀すべきことではあるが、然し乍ら唯單に在來の信仰を否定し之を排撃することは考慮すべきである。宗教が人生に缺くべからざるものである以上恐らく在來の宗教を全然廢棄することは不可能であると思ふ。迷信を打破する一面に於ては何等かの建設がなければならぬ。然らば本島に於ける舊慣宗教を調査研究し、其結果を得て、不良のものは之を指摘し、以て民衆の覺醒を促し、良きものは積極的に其普及を獎勵することとし、更に一面に於て優良なる外來宗教の宣布を俟つて、其宗教的效果の得らるゝ機に致すことが、最善の方法ではなからうか？ (會)



佛教の慈悲と國際事變

文學博士 境野黃洋

宇 宙 愛

佛教の慈悲はその愛の及ぶ廣がりから云へば宇宙愛と名けることが出来る。これは實に佛教獨特のものである。耶穌教の如きは人類愛と稱しその愛の及ぶ範圍は人類の間に限られ、而も同じ人類の間でさへも耶穌教信者でないものは、異教徒として愛しないのである。人類相愛は世間一般の愛であつたことである。佛教の愛は動物にも及ぶので、これは佛教にとつては非常に重大な意味がある。といふのは釋尊が佛教を宣説せられた一理由は、婆羅門教が動物を犠牲として神の祭壇に捧げたので、それを非常に慘酷な事として斥けやうとされるのにあつたからである。更に佛教の愛が植物に迄及ぶことを物語る話がある。或時佛の弟子が賊に遇ひ路傍の蔓草を以て縛せられたので、その僧は人が来るのを待つてそれを解いてくれるやうに頼んだ。するとその人が大いに笑つて、あなたが縛られてゐるのは極めて軽い蔓草である。一寸力を出せば容易に切れるでは

ないか」といふとその僧は「いや、私はそのことは能く知つてゐるが、今之を切れば草を傷はねばならぬ。だから御面當だがどうぞ解いて頂きたい」といふのであつた。

殺すことを禁じた戒法にしても、所謂殺生戒といふのは人を殺すなといふのが眞意であつた。一般の動物を殺すなといふ戒としては惡畜生命戒といふのがあり、植物を殺すなといふ戒としては壞生種戒といふのがあつて、動物植物に就てそれぞれ別々に戒が立てられてあつたのである。更に進んで動植物のみならず、佛教の愛は無生物に迄及んでゐる。無生物といへども人の生活に對しては精神的影響を及ぼすもので、旭は人の心を爽快にし、月は人を悲ましめる乃ち一種の生活的意義があるものとして尊重されたのである。總括的に云へば佛教では生物も無生物も一切を愛するのであつて、之を宇宙愛といふのである。

絶 對 愛

次に愛の深さから申せば、佛教の愛は絶対愛である總ての人、總ての物を惜むなといふ。人に就て云へば善人勿論惡人をも惜むことは出來ぬ、元來善人とか惡人とか云ふことは絶対的に云へることではない。基督教では「汝の敵を愛せよ」と云つて敵を豫想してゐるが佛教には對立的に敵といふものを認めない。總ての惡人は、その人の立場に立つて見れば皆己むを得ずして罪惡を犯したものである。今日善を行ふ者と雖場合によつては皆罪惡を犯し得ないことは無い總ての人が皆惡をなし得る素質を持つてゐる。犯さないのはその人が優れてゐるからといふよりも、立場が優れてゐるからである。全く立場のお蔭である。所謂惡人も心理的に見ればその人の光天的な意志薄弱、或は病的精神によつて罪惡を犯すのであつて、決して惜むべきものではない憐れな生れつきを氣の毒に思ふべきである罪惡とか仇敵とかいふことを考へるのは間違ひである。一切を平等に愛せねばならぬこれが佛教の絶対愛である。

戦争観

かやうに觀て來ると佛教は如何なる宗教にも見られない慈悲の精神を説くのであつて、實に徹底した平和主義である。所で戦争を如何に觀るかといふに、決して之を否定しないのである。

元來道德は愛だけで成立するものではない。それは一つの重大なる要素に過ぎないであつて、更に正義がなかつたならば道德は維持されないのである。乃て愛と正義とかうまく並行して行けばよい

のであるが此の兩者は往々にして衝突することがある。若し衝突した場合には愛を正義の犠牲にすることがあつても正義が蹂躪されては世の中は全く暗黒である。故に正義を推進するためには戦争でも否定することは出來ないのである。

經典に就て見るのに、泥槃經に摩曷陀國と跋耆國と戦つた時のことが出てゐる。摩曷陀國の阿闍世王が釋尊の許へ今度の戦争は勝つか敗けるかを伺ひに行つた。すると釋尊が答へられて「常に七法を奉ずるものは勝つ、第一政治が合議に依つて決せらるゝものは勝つ、第二に君臣和合して忠良の大臣が政治を輔くるものは勝つ、第三法律に依て國を治め、他に向つて野心無きものは勝つ、第四社會の秩序井然として亂れざるものは勝つ、第五父母に孝養を盡し師長に敬事し道德行はるゝものは勝つ、第六天地神明を尊敬するものは勝つ、第七宗教を重んじ傳道師を優遇するものは勝つ、今跋耆國には正しく此の七法が行はれてゐる。故に汝が之と戦へば必ず汝が負けるであらう」と云はれた。即釋尊は戦争を否認せず正義の國は勝つと教へられてゐる。だが此時は阿闍世王は必ず負けると聞いて戦争を已めてしまつた。

又律の中に次のやうな話がある。やはり摩曷陀國がその隣國と戦ふ事となつた時、總指揮官になつた大將が佛教僧者であつた。或人が阿闍世王に向つて、「佛教徒は水を呑む時その中の微生物を殺してはならぬといふので一々水を濾して飲むために濾水鉢を持ち歩いて

ゐる。そんな者が戦争に總指揮官となつて多くの敵を殺すことが出来るわけはないから、外に適當な人を任じなければ戦争に負けるでせう」と思言を入れた。王は甚だ迷つてその事を釋尊に申上げて伺つた所が、釋尊は王に向つて「水中の小さな蟲は汝に向つて如何なる害を加へるか」と問はれた。王は「何の害をもなさず」と答へると釋尊は「たとへ小さな蟲でも何の害をも爲さないものは絶対に殺すことは出来ぬが、害をなす者は何ものでも撃つてよいから少しも憂へることはない」と訓へられた。

右によつて見るに釋尊は、正義は勝つ、不正なるものは撃つてよい、といふ考へであつたので愛に於ては最も徹底した宇宙愛絶対愛を説かれたが正義を行ふためには決して戦争をも否認せられなかつたことを知るのである。かうした釋尊の教へによつて、我々は佛教徒としていざ事ある場合に處すべき自らの態度は、少しも迷ふことなく明瞭に決することが出来るのである。

——(完)——

茅居好茅居好
節繁風情何處討
不彈濁世繁華夢
老倒能開懷抱
常無事即眠早
淨穢隨翻幾絕倒
寂照圓明後缺端

茅居素靜無煩惱
松微吟動幽草
但惜光陰無價寶
眼燃乾坤空古今
柴門不掩雲來鎖
忽憶々光浩々
果然勝於蓬萊島

——(黃藥和尚大和集「結茅歌」)——

如是之法	佛祖密附	汝今得之	宜能保護	銀曉曉雲
明月照庭	頌之不齊	混則知處	意不在言	來藏亦赴
動成冥日	差落顛倒	背觸俱非	如大火聚	但形文彩
即屬染汙	夜半正明	天曉不露	爲物作則	用拔諸苦
雖非有爲	不是無語	如臨寶鏡	形影相親	汝不是渠
與非是故	如此嬰兒	五相完具	不去不來	不起不住
變々和々	有句無句	終不得物	語未正故	重離六爻
偏正回互	疊而爲三	變盡爲五	如葉草味	如金剛杵
正中妙訣	敲唱聲舉	通宗通塗	共帶捷路	錯然則吉
不可犯竹	天真而妙	不屬迷悟	因緣時節	寂然照著
翻入無間	大絕方所	毫忽之差	不願得昌	今有頓漸
默立宗趣	宗趣分矣	即是規矩	宗通趣離	宜常流注
外散內攝	藥病伏原	先聖悲之	覺法權度	隨其顛倒
以錦爲渠	顛倒想後	肯心自許	契合古樸	請觀前古
佛道難成	十劫觀樹	如虎之缺	如馬之馬	以有下劣
寶几珍御	以有賢異	羈奴白狐	昇以功力	射中百步
箭鋒相值	功力何預	木人方歇	不女起舞	非情識到
察容思慮	臣奉於君	子順於父	不順非子	不辜非輔
游行密用	如愚如魯	但能相續	名主中主	

——洞山良价禪師「寶鏡三昧」——

臺灣に於ける二三生祠の實例 (二)

臺北大學農學教授
助手 文學士

李 添 春

二、施琅の生祠

施將軍廟又は施公祠は、現在澎湖島に尙一つあるが、臺灣縣誌に據れば元臺南府にも一つあつたといふことである。併しそれが生祠であることは、諸文獻には明かに説明してゐないけれども、施琅の亡くなつた年は遙かに祠廟創建年代より後であつたから一揆言すれば施琅の生前既に祠廟が出来て祀られてゐたから一生祠でなければならぬ。

臺南に於ける施將軍祠の創設年代に就いては、諸文獻に餘り記載してゐないが、連氏の通史(卷十、典義志、上冊二八九頁)には次の如く記つてゐる。即ち臺灣縣の條下に

施將軍祠、在臺南坊樓子林、康熙二十五年建、五十九年地震圯とある。康熙二十五年(西紀一六八六年)の創設であれば、恰度清朝の臺灣領有後三年である。又同書、澎湖廳の下には、

施將軍祠、在媽宮澳東街、康熙二十四年人民合建、祀靖海將軍施琅、道光六年通判蔣鑑壽款生息、

附祀在澎湖雜文武官員、春秋致祭(通史上冊二九六頁)

とある。康熙二十四年(西紀一六八五年)であれば、臺南のそれより一年早く創建したものである。然るに臺灣總督府所藏寺廟彙編の澎湖廳施將軍廟の條には、「其の創建及關係者詳かならず」とある。又杉山氏の臺灣名勝蹟叢誌の同廟の條下には、「廟の創建詳かならず、清國領臺灣時なりとの説あり(同書、六)一」と言つてゐる。尙ほ貴重な史料の縣誌や廳誌にも、この二廟の創建年代を記録してゐないから、

連氏の説は何處に根據を置いてあるか、或は疑がないでもない。然るに筆者が澎湖廳誌(卷十三、臺灣縣誌、第六卷、六九二頁以下)に施琅自筆の「施將軍廟碑記」を見た。これが今尙ほ現存してゐるか否かは知らぬが、孰れ澎湖島へ行く機会があれば見て來たいと思ふ。併し全文を讀んで見ると、殆んど施琅の平臺紀事に過ぎないが、碑内には九字の闕字があるといふ。而かもその闕字は自分の生祠の事を遠慮して省いたのではないかと疑はしい處がある。今その碑文の後段を掲げると、次の通りである。

余○千○八○〇○躬臨赤嶺受降、海嶺從是廓清、以數十年來未靖三波、臨淵血戰始定、則斯島謂非嚴區、爰是誌於○○〇〇朝○威之故記之云。(九字) (闕)

太子少保靖海將軍靖海侯世襲岡安水師提督事務施琅立

とある。此の九箇の闕字が何を省略したかは、容易からざる問題ではあるが、それよりも、何故に施琅が親ら碑記を建てたばならなかつたか。勿論施琅自身が自分の生祠を建てたのでないだらうが、恐らく當時澎湖島に於ける官民がその德に報ゆべく生祠を創建して、更に其の建碑を乞うたのではなからうかと思料する。澎湖廳志卷二(余誌、第六卷、)には、

施將軍廟、在媽宮澳東街、前靖海將軍水師提督施琅、平寇有功、封靖海侯、官民建祠祀之……(闕點は筆者添)

これに依つて官民の所建であることがわかる。又臺南にある施將軍廟も、人民の所建である。即ち臺灣縣志(余誌、第八、)に次の如く言つてゐる。

施公祠在臺南坊、祀太子少保靖海侯施琅、有碑記、創侯之人云也、不幾一人、且惡語留臺、勿棄、於臺事多所建曰、民懷其德、立祠以報功焉、康熙五十九年地震圯

こゝに碑記ありといふは、聞く所に據れば現在臺南市天后宮内にある「靖海將軍侯施公功德碑記」は、即ち是であるといふ。今その碑文を読んで見ると別に生祠のことを言つて居ない。康熙三十二年

(西紀一六九二年) 臺灣縣四坊鄉耆紳戶等同立とある。即ち清國領臺後十年に建てた頌德碑でつて、施將軍祠建立後(連氏の説)七年に當る。宮

本臺灣通志十四卷に據れば施琅は「康熙三十五年三月卒於官、年七十六」とある。さうすれば碑記はその生前三年、生祠は十年、換言すれば前者は施琅七十三歳、後者はその六十四歳の時に設建されたものである。假りに生祠建設年代について、連氏の二十五年説が誤りとすれば、その康熙年間の創建であることは疑ひない事實である。何故なれば諸文獻共に「五十九年地震圯」を傳へてゐるからである。それであるから澎湖島のそれと合せ考へると、臺南の施公祠は碑記建設と相前後か、若くは連氏の説を正しいと看做さねばならぬ。吾人は更に有力の史料が出なければ連氏の説を妥當とする。これと同様に澎湖島にある施將軍廟も亦施琅生前の創建と看做さねばならぬ。これは、尚ほ現在してゐる。今臺灣總督府所藏の寺廟彙報に依つてその現状を見るならば、即ち次の通りである。

(名 稱) 施將軍廟 (又は施公祠) (所在地) 澎湖廳馬公街馬公六七八番地(祭神) 主神施將軍(塑像)

(境内坪数) 三十六坪一合(建物坪数) 三十一坪一合一勺(例祭日) 十一月十七日

(管理人) 林 狗 (頭 廟) 林蜀飛 (俗 人)
(沿革) 主神施琅は福建の人、琢公と號す、康熙二十一年水師

提督となる、翌年鄭氏を澎湖に伐ちて克つ、其の功あるを以て官民祠を建て之を祀るといふも、其の創設及關係者詳かならず、後建立久しく頽敗せしにより、秀才劉元成なるもの改築を主唱し、官民有志より三百五十六圓を募り、光緒十五年（西紀一八八九年）一月工を起す、同年十二月竣工せり。現在の廟宇即ち是なり。

是れは即ち生祠施將軍廟の現状である。後章説明の如く、臺灣には古來相當に生祠があつたけれども、殆ど全部が頽敗して、唯澎湖島の施將軍廟のみが獨り現存してゐるのは甚だ不思議ではないか。

三、生祠 衛公祠

臺灣府誌第七卷（全誌第一卷）（四三九頁）に

衛公祠、諱藻，在東安坊府城隍廟左

とある。又臺灣通史卷十典禮志（上冊、二）には、

衛公祠、在東安坊府城隍廟、康熙四十六年建、祀臺灣知府衛公。藻。

とある。孰れもその生祠であることを表明して居ない。併し臺灣縣誌卷七、文藝志（全誌第一卷、六）（三〇一—六三二頁）には、陳瑛の「始建衛公祠記」といふ一篇がある。瑛は衛公と同時代に臺灣縣知縣として任ぜられ、更に分巡臺灣道として康熙五十四年迄在任した人である。その記する所を掲げば次の通りである。

「夫子稱子產有君子之道四焉、而悉數之、曰恭、曰敬、曰惠、曰愛。持此以求後世爲政者、雖兩漢循吏、未易與許也、若前太守衛公、其本斯道以爲治者乎、公相國文清公之猶子、少司馬公之賢嗣也、

號稱貴介、而抑遜自持、不異寒素、庶務必躬親、夜秉燭治官書、

漏下不輟、營民如子、雨下車、手車水丁以安流移、嚴禁雜派、歲

時屬員、或偶尋酒宴、未嘗輕受、數年中從不索取一夫一役、郡

邑民寄、得以息肩、遂休養生息之樂者、聖公賜也、其有豪強梗法

弗化於訓者、則懲之不少假、是恭也敬也、惠與義也、公殆變而有

元矣、公以壬午冬（康熙四十一年、西）十月薨、至丙戌（康熙四

十六年）秋九月秩滿、奉特旨陞廣東都轉運使、去臺之日、士民戀

公弗忍舍、相率建祠、附城隍廟左、意蓋欲以神道事公也、祠規制

英狹、稱公儉樸、韓昌黎詩云、瘠有國人懷德範、一間茅屋祭昭王、

斯之祠謂矣、小侯子荀爲臺令、公屬也、知公甚悉、茲復謬持使節

東來、拜公祠下、因木諸父老意、述公政之聲華大者、有此四德、

以備他日風謠之採、且以冀臺人甘棠之思於永永也、公名藻、號南

村、山西曲沃人

とあるのはその全文である。此に依て之を視るに、去臺之日……

相率建祠」と連氏の康熙四十六年建とは略一致してゐると思ふ。更

に「意蓋欲以神道事公也」といふのは、即ち暗に生祠のことをいふの

ではないかと考へる。併し乍ら衛公祠及其の碑記が今尚ほ現存して

居るか否かは不明である。孰れ臺南へ行く機會あれば更に詳しく調

へて見たいが、筆者の現左の考へでは生祠ではないかと思ふのであ

四、陳瓊の生祠

臺灣通史卷三十四(下冊、一)循吏志に陳瓊傳の最後に、
後治舊有異政、臺人思之、塑像於文昌閣、日張燈鼓樂以祝、及
卒哭之、入祀名宦祠。

とあるを見れば、直ちにその生祠であることがわかる。更に臺灣縣誌卷二には、以上の外に去思碑あることを言つてゐる。即ち臺灣全誌第三卷(二一四)に、

至今邑治左有去思碑、額曰尚書亭、誕日臺人張燈鼓樂以祝、爲海疆治行第一、崇祀名宦、又塑像於文昌閣、以志不朽。

上掲の二文を見るに、孰れも「誕日張燈鼓樂以祝」とある。誕生日に音楽を奏して祝ひすることは、生者に對する禮である。況んや通史には又「及卒哭之」とあるから、生祠であるといふことに疑はない。而して去思碑は尚書亭とも稱するといふから恐らく其の死後に建てたものであらう。通史(下冊、一)に依れば、

五十七年卒於官、下旨移柩、追贈禮部尚書、賜祭葬、諡清端とあるから、「尚書」は追贈であることがわかる。それであるから去思碑は其の死後の建設であつて、生祠とは關係ないであらう。更に

角頭、は海疆治行第一と稱せられ、清朝治下に於ける臺灣の爲政者としては稀に見る人であつた。夏彰の秩滿留別臺陽詩に、

斷獄若神懸綫額、澄懷似水愧清端。

清端といふのは即陳瓊の諡である。澄懷似水とは、神の如き心を

いふのであらう。陳瓊の傳は、府縣共に之を記載してゐるが、廣東省海康の人である。康熙四十一年臺灣縣知縣に任ぜられ、四十三年勅を以て刑部主事に遷り、又四十九年には再び分巡臺灣道として來臺五十三年更に澎湖の巡撫に擢用せられた人である。其の臺灣に於ける善政に就ては、通史(下冊、循吏、一〇三七頁)に、

……清操刻苦、慈惠愛民、公務之暇、時引諸生考課、與談立品敦行、夜自巡行詢父老疾苦、問諸讀經叩門入見、重予獎賞、或有獻飲高張者必嚴放之、歲終登舍以振、窮黎感其德……四十九年由四川提督學政任臺鹽道、士民聞其再至、爭趨海濱迎之……とある。臺灣の爲政者は、連氏の言を語りて言へば、「貪鄙之倫、踵相接也」である。けれども陳瓊の如きは、數百人の中の一人、誠に晚故の巨星であつた。

結 言

臺灣に於ける生祠は上掲の外に、臺南には新公祠、蔣公祠、吳公祠等があり澎湖島には胡公祠があつて、孰れも生祠中神として祀られたものらしい。先づ例へば新公祠の如きは臺灣通史に依れば、康熙三十六年(西紀一六)の創建であると(上冊、二九頁)いふ。然るにその祭神である臺灣府知府の新治揚は、康熙三十四年(西紀一六)より同四十二年(西紀一七)迄在任した人である。故にその在任中既に神として祀られたことになる。況して彼は任期滿了後更に廣東省の高雷廉道に陞進したのであるから、生祠であることは明瞭である。



明代儒教を中心としての 佛儒關係に就いて (二)

文學士 李 孝 本

上篇 明代儒佛兩教關係史料

第一章 明代の儒教者

第一節 薛敬軒と呂逆野

(1) 薛敬軒海寧字德潤、又自ら慎獨子と號し、人稱して薛夫子となす。山西省河津の人なり。太監洪武二十二年(一三八九)に生れ、英宗天順八年六月十五日(一四六四)卒す。享年七十六なり。彼は復性を宗となし、禮俗を正系とす。力行を第一義とし、文藝を第二義となす。氣節甚だ高く、其言に「拜爵公朝、謝恩私室、其所不能爲也」とあり。又其遺詩に「七十六年無一事、此心始覺性通天」の句あり。成化元年文淵と號し、隆慶五年(一五七一)孔廟に從祀し、光儒許子と稱す。

著書に「國朝錄」(廿四卷、正續各十二)、「薛文前集」(廿四卷、門人明孫鑑編)、「門人明孫鑑編」。

「正續錄本」(十卷、續)あり。

敬軒の言行は慎重にして、吾人を警策する所多きも、佛教評價に二三を擧げ得るのみ。「讀書錄」に佛敎の明心見性と儒敎の天命問題から論じて曰く、

天下無性外之物、而性無不在、君臣父子夫婦長幼朋友皆物也、而其入倫之理即性也、佛氏之學曰明心見性者、彼既舉人倫而外之矣安在其能明心見性乎、若果明心見性、則必知天下無性外之物、而性無不在、必不舉人倫而外之也、今既如此、則偏於空寂而不能真知心性運用之全壽矣、

とあるが、彼の宗旨は復性にあり、故に人倫に對しては、當然起る批評なり。又宋儒の性理學からいふても、人性は天命といふ五倫の理を基とすべし。中節にも、「天命之謂性」とあり。故に理即性なり然るに佛敎の明心見性とは正見の心を以て自己の佛性を徹見するこ

をいふ。故に儒教的に明心見性を解釋することから起る言語上の差異による非論と見るべし。空寂の意義も亦同様に解釋の如何にかゝる。佛教の空に但空と誤解あり。一般の儒者は殆んど異口同音に空寂を攻撃せるも、儒空に解せるよりの評なり。又いふ

釋子不問賢愚善惡、只願己者便是

此語は善惡すれば、實に佛教的精神を顯明に表現したる過激な批評といふべし。否、凡ての所謂教たるものは、ありたきものなり。

「只願己者便是」は佛陀の教説を願望せねばならぬといふ條件にして、此條件があつての「不問賢愚善惡」なり。儒教に於いても「性相近也、習相遠也」とあり、蓋しは性善説を強調す。斯見れば、賢愚善惡は決して宿命的のものでなく、後天的に屬す。故に聖人でも改悔歸依すれば、當然許容すべきものなり。儒教にまた

一息之違異古今之運同、一塵之土與天地之土同、一夫之心與臣民之心同

とあるに照しても此評は何ら攻撃するに似せず。蓋し其意有修性なればなり。又

釋氏出世法、天地陰陽古今皆此也、而可出乎

釋子以罪福誘入豈是公道、

釋氏使人禿其髮、絕其配、不孝絕倫之罪大矣、

聖人順天理而盡人倫、釋氏逆天理而滅人倫

釋氏本是目混其身、紛々之言皆其徒附會也

等あるも、要之、敬軒は純粹學者的態度を執りたる故、其佛教評は大した誤謬なく、有のまゝ述べたるのみ、彼を中心とする河東學者の一派も大體張皇を依せざる傾向を示し、佛教評も攻撃の意なく自學の修養に資せるものなり。

(2) 清野詮柄、字仲木陝西省高陵人、成化十五年(一四七九)に生れ、嘉靖二十一年七月薨す。享年六十有四なり。其系統を圖解せば左の如し。

薛敬軒一段宏思——周小泉——薛思庵——呂清野

二十七、八歲嘗叩寺に請學、正德末年家居して、京師別墅、東林書院を築き、解州に解梁書院を建立す。南都に在つて、湛甘泉、東廓と共に講席の所主となり、東南の學者盡く其門より出ず。

著書に「清野子内篇」(二十七卷)「周子鈔釋」(三卷)「張子鈔釋」(六卷)、「二程子鈔釋」(十卷)「朱子鈔釋」(二卷)あり。

彼の學は格物を以て窮理となし、躬行を旨とする河東學派の大威名なり。佛教評を見るに

問、白沙山中十年作何事、曰、昔有僧在終南山修行三十年、一日得長安、見花遂返還初無所動其心、可見亦頗於繁華寂寞中學、故

於動處用功修寂靜之清靜、吾儒謂之克治

とあり。佛教者は往々にして動を疎ふ傾向あるは嘗て俟たざるも、動中靜、々中動の語あり。「清靜」とは極端なる判斷なり。又明心について次の如く述べたり。

學者只說明心可以窮得天下之事、宇宙內事固與吾心相通、使一々
聖賢、何由致知、所謂不聖賢而知者、即所謂明心見性也、非謂而何
彼の言に従へば性と理は二元的となる。明心あつて見性なければ
ぞ明心といはん、天下の事象は無限なる故一々聖賢は迂なるも甚だ
しきものなり。又理會なくして知るは有くも人間としては不可能
なり。佛敎を知らざる者治せる論と見るべきか。尙色々の言あるも
取るに足らざれば略す。

第二節 第一齋と夏東殿

(1) 第一齋證諒字克貞、門人私諡して文獻といふ。江西省上饒人な
り。咸豐癸卯二十年(一四二二)に生れ、光緒四十四年(一八九二)五
月二十七日卒す。享年七十なり。少にして聖賢の學に志し、科擧の
爲の學問を排し、吳康侯の門に入る。康侯其入室を許す。

著述に「日錄」(四十卷)、「三禮訂詁」(四十卷)、「春秋不意」(十二
篇)等あるも、散逸して傳はらず、只同門の胡敬齋の批評により其
大概を推すのみ。

是儒者陷入異敎去。

石齋(白沙)不讀佛、他判論證書、但其語和證書、只是將聖賢之語
來證己見耳

克貞見枯木之人得法便說他是道

等によつても、佛道二敎にも理解あることを知る。吳康侯が門人に
語らざる事も、一齋には皆傳して證ざる所なしといふ。故に或に

康侯の全精神は敎證よりは、寧ろ一齋に在むべきものか、然に特筆
すべきことは、其門に陽明を出だせたることなり。

(2) 夏東殿諱尚朴字敬夫、江西省永豐の人なり、其生没年月は不明
にして、著述に「東隱集」(六卷)あるも未現なり。今は「明倫彙編」に
從つて其大體を見ん。若年に一齋の門に入る。然るに彼の學問は敎
證の主眼にあり。象山の學を尊し、心と理を二元的に取扱ひ、

心所以窮理、不足以盡理

といつて、心即理說を排斥す。其敎證も敬齋に似て、白沙をも合
せて非難す。偶々「四家語」を閲し、黃黎の裴休に「當下即覺動念則
非」と答へたるを見、「禪學誠有動人處」と感歎す。其後「聖子遺書」
を讀み、「吾道自足何事旁求」といへり。次に「文藝」によつて佛敎評
の斷片を拾つて見るに、

不問此心靜與不靜、只問此心敬與不敬、敬則自靜矣

とあるによつても主敬にあるを知るべし、其佛敎評は此主旨に基
いて、一般儒者の如く、苟しくも佛老なれば、容赦なく排し、聖不
理を問はず、證學と目せられたる白沙を極評せり。

釋老所謂靜、特虛無寂滅而已、如枯木死灰、安有物乎

といつて、儒敎は靜中に生意のある或物ありと主張す。寂滅而已は
明かに文字解にして、佛敎の術語の真意に非ず。生意ある或物とは
夫れ太虚。果して然らば、寂滅は佛敎の形態にして、枯木死灰の
如くして、而も枯木死灰に非ず。即ち有無を超越したるものなり。

故にやはり生性のあるものに非ずや。

吾儒曰喚醒、釋氏亦曰喚醒、但吾儒喚醒此心要照管許多道理、釋氏則喚醒在

といふに、儒教は辟夢の心を喚醒して善へ向ふべく努力させる。譬へば惺惺の心を起して仁といふ善へ進ましめ、不仁をなさしめざらしむること、即ち行善止惡なり。然るに佛教にも喚醒の語あるからには、豈理由なくして喚醒のみあるべけんや。夢由なくして醒者を無闇に起すことは常識にも外れたることなり。佛教の喚醒は明心見性なるが故に、問題とするに足らざるなり。次に「陳白沙與張東白論學詩」の批評を見るに攻絲頗る鋭く、湛甘泉の解釋を白沙の意に非ずと斷ぜり。其中の二三を拾つて見るに

渺哉一勺水、積累成大川、亦有非積累、源泉自涌々

の後二句を佛教の「一超直入如來地」と評す。此詩に白沙にして始めて成し得る領を尙ぶ一好例なり。東毅の立場としては當然驚かされざるを得ず。

寄語了心人、棄諸本無絃

を程子の「下學而上達」學之要を引いて、

今論學不說下學之功、遽及上達之妙、宜其流入異學而不自知也、此詩游新藝妙、見者爭誦之而不知其有悖於道、予不得以不察と評論せり。最後に近世の學者に對する批評を見るに

不難於一大而難於萬殊(中略)三教窮達交修並進、而積之以歲月之

久、庶幾漸有涸泊處耳
といへるは誠に然り。

第三節 陳白沙

陳白沙號龍谷先生公甫、別號石野、晚年石翁と稱す。廣東省新會の白沙里の人なり。宣宗憲三年(一四二八)に生れ、資性魁偉なり。二十七の時、崇仁に至つて吳康齋に師事す。康野徒を導くに宛も禪俗の如し。一日早朝白沙未だに起す。即ち「秀才若爲懶惰、即他日何從到伊川門下、又何從到孟子門下」と醒醒を以てす。白沙里に歸り祭子の菜を履し、春陽室を築き、靜坐すること數年なり。孝宗弘治十三年二月十日(一五〇〇)に卒す。行年七十三。萬曆十三年(一五八五)孔廟に塑像、王陽明と共に從祀せられ、先儒陳子と稱し文恭と諡す。

著述に巨著の著なし。唯後世其詩文を輯録せるものに「白沙子全集」あり。十二卷本は門人龍谿の選集と後の王安舜の增補纂刻に係る。九卷本は黃澐の校正と何龍祥の重刻に成る。現行本は清初の何九鸞が詩篇を收拾して舊刻に合し、鄭嗣昌が之を校正刊行せるものにして、凡て六卷々首一卷より成る。

白沙の學は初めは全く康齋より發せるも、其歸つて杜門して古今の書を窮覽すること數年にして自ら發明する所あり。即ち心虛を以て基本とし、靜坐を以て門戸とし、師學と大に其趣を異にするに至る。次の言に徴して明かなり。